

弥勒如来坐像

講堂の本尊は、鎌倉時代（1185–1333）にさかのぼる重要文化財である弥勒如来像です。

弥勒如来は、インドの神マイトレーヤ、未来の仏に起源を持ちます。

仏教の教えの基礎となった釈迦仏は、仏教の影響が衰える未来を予見しました。後継者として、弥勒は、地上に現れ、悟りを開き、仏教の信仰を復活させる時が来るまで、神聖な存在の住居である兜率天で待つよう課されました。このため、弥勒は通常菩薩（まだ悟りに達していない人）と呼ばれ、実際に多くの仏教宗派は弥勒を如来、つまり悟りを開いた者とは呼びません。

講堂にある、人目を引く高さ 284 センチある弥勒像は、寄木造と呼ばれる複数のブロックを組み合わせる造仏技法によって作られました。寄木造は 10 世紀後半に確固たる地位を築いたと考えられています。これより以前の、平安時代(794-1185)には、一木造りといって、一つの木材から像が彫られるようになり、7 世紀と 8 世紀の仏像の典型である銅像に取って代わりました。しかし、如来の高くそびえ立つような像が作りたいという願いが強まり、この革新的な技法が編み出されました。巨大な像を建造することを簡単にするだけでなく、この技法では、あらかじめ定められた仕様に基づいて、それぞれのピースを別々に彫り、組み立てることができるという利点がありました。さらに、個々の中身がくり抜かれていることが多いため、最終的な像はかなり軽量となります。また、全体のプロセスが簡素化され、より迅速になり、平安時代末期から鎌倉時代にかけて彫像の数が激増しました。